『言語情報学研究報告』No.10（2006）

教材分析と評価―既存のチェックリストと教材評価の方向性―

鵜澤菜摘子（東京外国語大学博士前期課程）

1. はじめに

本稿は,既存の教材評価チェックリストを市販の EFL テキスト教材(内の主としてスピーキング活動)の比較に実際に使用することで,既存のリストの有用性と問題点を考え,TUFS 言語モジュール英語会話教材（D モジュール）の教材評価に必要な視点や教材評価の方向性を探るものである。TUFS 言語モジュールの評価を考える上で 1 つの足がかりとなれば幸いである。

2. 教材分析と評価

2.1 目的

この研究のテーマは，教材評価とは何か，どのように進めるのかについてまとめて提示すると共に，既存の教材評価チェックリストを市販の EFL テキスト教材の分析と評価に実際に使用して，その有用性と問題点を考え，TUFS 言語モジュール英語会話教材（D モジュール）の教材評価に必要な視点や教材評価の方向性を探ることである。

教材分析と教材評価は一体である。“The point has been made by Cunningsworth (1979; 31) that ‘course materials are not intrinsically good or bad-rather they are more or less effective in helping students to reach particular goals in specific situations’” (McGrath, 2005)。 の言葉が示す通り，本質的に悪い教材というのは存在せず，教材をどのような状況で何を目的に使用するかが問題であり，ある教材の価値を判断するためには，その教材が，どのような状況・目的においてどういった力を発揮できるかについて深く知る必要があるからである。そのため，評価の前の分析は欠かせない。

また，ある状況を前提に評価すれば，その状況には適しない教材が出てくる。しかし，その教材は別の状況には適する可能性を持っている。評価結果だけでなく，分析結果を明らかにしておくことは，教材の有効利用を考えるのに役立つと共に，より良い教材への改訂にも貢献するだろう。

教材分析と評価の実証研究を進め，最終的には TUFS 言語モジュール（主として D モジュール）の有効利用模索と改訂のための教材分析と評価への足がかりを提示することを目的に，本研究を進めていくことにする。

2.2　教材評価の手順

教材の評価は現場において教科書や教材の選択というかたちで広く行なわれていることと言えるが,「教材評価」という「評価論」の中の１つの研究分野としては広く行なわれているとは言い難い。それ故，研究された結果が現場で広く応用されている状況があるとも言い難い。

馬場（2003）は「教材の評価は授業などの指導プログラム評価の一環として行なわれることになるが，さまざまな教材の評価基準が確立しているとは言えない。そもそも，望ましい教材とは，指導の目標，学習者の能力や動機づけ，教師の指導力，クラスサイズなど，さまざまな要因によって異なるものなので，厳密でかつ汎用性のある基準を設定することは不可能だろう」と述べている。その言葉が示すように，教材評価に関する文献は少なく，そのほとんどが，現場で使う教材を選択する際の選択過程と，その過程において使用するためのチェックリスト，その使い方の提示に終始している傾向にある。

その中でも，McGrath（2005）は，現在までに提示されている教材評価の手法とチェックリストをまとめるだけでなく，評価の前に行う教材分析と，更にその前に行う状況分析（教材を使用する環境や対象についての分析），その他教材評価に関する理論的背景や実践等にまで広くまとめている。

McGrath（2005）によれば，教材評価の手順は次のようになるとされる。

まず教材を使用する対象となる学習者，クラス，コースやカリキュラム，教師について，context analysis と needs analysis を行う。次に候補となる教材を分析する textbook analysis を行うが，context analysis と needs analysis の結果に確実にそぐわないものを捨てることが目的なので，ここでは教材を概観する分析にとどめる。

この分析が終わったところで，first-glance evaluation を行う。ここでは上記の通り，確実に使用出来ないものを取り除き，数冊を次の候補として残す。

最後に，残った候補を更に詳しく見て評価する close evaluation を行い，selection で使用する教材を選択することとなる。

初めに候補となる教材をどう選ぶかについては, Cunningsworth（1984）や Rea-Dickins & Germaine（2003）がテキスト自体に書かれたテキストの特徴や書評で教材をある程度取捨選択するという方法を挙げている。これは非常に数多く販売されている教材の中から候補とする数冊を選び，購入するには，現実的な方法だと考えられる。

各分析および評価の方法において，多くの論文・文献で提示されているのが，チェックリストを使用するというものである。McGrath（2005）も，教師や評価者の impressionistic evaluation 等と比べて“the checklist has at least four advantages”（McGrath, 2005）。として，“systematic”，“cost effective”，“convenient”，“explicit”（McGrath, 2005）の 4 点を挙げ，様々なチェックリストを例に出して使用方法や作成方法について説明している。

同時に，McGrath（2005）はリストがあくまでも作成者の主観によって作られているものであること，そのために既成のリストを使用する場合は各状況に合わせた改訂が必要であることも，Williams（1983）の論を引きながら述べている。

そこで本研究では，最終的に TUFS 言語モジュールの評価を目指す前段階として，McGrath（2005）がまとめる評価の手順に則り評価を行う中で，既成の様々なチェックリストを実際に使用し，リストの有用性やどのリストがより教材評価に適しているか，改訂の必要性は，ということを考えることで，教材評価の方向性を探ることにした。

2.3　状況分析

2.1 並びに 2.2 で述べたように，本質的に悪い教材というものは無く，教材を使う場所，人，対象にとって，その教材が助けとなるかどうかが重要である。

この「状況」という要素は，独自のチェックリストを提示している論文・文献においてはほぼ大前提とされており，リストの質問項目の採点や重み付けは，それを理解している評価者に任されているだけで，特に記述されていないことが多い。

例えば Rea-Dickins & Germaine（2003）は，辞書の教材評価の例として，West（1987）のチェックリストを挙げているが，このリストで 4 段階のスケールで表す辞書の使い易さについて，なぜ 4 段階なのか，どのようなものが何段階目にあたるのか，といった説明は無く，評価をする人，すなわち教材を使う人が教師や生徒，クラスについて知っており，それをもとに判断することが前提になっていると考えられる。この他のリストについても，評価の観点や，その重み付けに明確な基準を設けたものは見当たらず，状況に応じて変わることが前提とされていると考えられる。

状況について詳しく，簡潔にまとめるリストは Skierso（1991）が作成するもの以外見あたらず，McGrath（2005）もリストではなく，分析に必要な観点を列挙しているに過ぎない。

そこでここでは Skierso（1991）のリストで状況分析を行うことにした。なお今回は実際に使用する対象が存在しないため，候補とした EFL テキスト教材を使用できるであろう年齢で，調査者に教授経験のある状況を仮定とした。

2.4　教材分析

2.2 で述べた first-glance evaluation のための textbook analysis は，多くの候補から数冊に絞る取捨選択が目的であるため，対象と定めた 2 冊のみを比較・評価する本研究では，textbook analysis に使用出来ると考えられるリスト－Rea-Dickins & Germaine（2003）が挙げる West（1987）の辞書の概観を比較・評価するリスト－を使用するにとどめた。

これは 2 つ以上の辞書を見た目やページ数，価格といった客観的な点を比較すると共に，文法説明や使い易さを 4 段階スケールであらわすようになっている。言葉の定義や採用している発音，カバーしている語数など，辞書比較のための項目もあるが，外見や使いやすさなど，教材にも使用できる比較項目があり，フォーマットも使いやすい。比較する冊数にもよるが，11 の比較項目＋コメント欄しか無いため時間もかからず，取捨選択に使用しやすい簡易リストである。

Close evaluation のための分析について，McGrath（2005）はその段階を提示していな

いが，close evaluation に使用出来る Daoud and Celce-Murcia（1979），Cunningsworth（1982），Skierso（1991）のリストを見ると，評価の質問項目の前に分析の質問項目が付いていたり，質問項目が分析結果と直結していたりしている。また，close evaluation の結果は状況に依存するため，状況を知る評価者が，教材と質問項目を見比べながら，合致しているかどうかを判断していくのが現実的であると思われる。

2.5　教材評価

取捨選択のための first-glance evaluation は Bruder（1978）の EVALUATION CHECKLIST と McGrath（2005）の例示しているリストを使用するにとどめた。前者は 8 つの項目に対して教材が適しているかを 3 段階スケールで評価し，コメントがあれば記すもの，後者は 4 観点・計 21 項目に教材が適しているかを Yes/No で付けるもので，対象が 2 冊であれば 10 分もかからない。

前者は selection を想定して作成されたものであるが，質問項目が簡潔過ぎたり，やや専門的と思われる箇所（教材が応用言語学で言われる「対照分析」を使用したものかどうか，教師がどのような教授法を拠り所としているかどうか）が見られたりする。また，リストを見ただけでは使い方がよくわからない。一方後者はリストを見ただけで何にどう回答すれば良いかが明瞭で，フォーマットも明瞭である。評価尺度も取捨選択をするのであれば Yes/No で十分だろう。

Selection のための close evaluation には，前述した Daoud and Celce-Murcia（1979），Skierso（1991）に Williams（1983）と Byrd and Celce-Murcia（2001）を加えた 4 リストを使用した。Cunningsworth（1982）のリストは前半に分析のための質問項目が付いているが，書き出すべき事項が極めて多いこと，評価の項目はほとんどがコメントを記すものであり，時間と手間がかかる上にすぐに結果を出すことが出来ないこと等から，“systematic”，“cost effective”，“convenient”，“explicit”（McGrath, 2005）の 4 点にそぐわないと判断し，使用しなかった。

3. STUDY

3.1　EFL テキスト教材

ここでは対象とした，EFL テキスト教材の選定について述べる。

通常，教材を使用するクラスや学習者，学習の目的等が前提にある中で教材を比較する場合，使用目的に即した，いくつかの似たような教材同士を比較した後，選定するという手順が取られる。

そこで，日本国内の中学から大学程度までで比較的広く使われているとされる EFL 用のテキスト教材を 5 冊程度，書店で選択した。そのうち，Cunningsworth（1984）や Rea-Dickins & Germaine（2003）が述べているように，テキスト自体に書かれたテキストの特徴や書評で教材をある程度取捨選択するという方法を取り，そこで得られた情報から，最終的に D モジュールとの比較・評価への提案を目指すことも考慮に入れ，大体中高

生程度が使用していると推測されるもので，4 技能を伸ばす活動全てを含みながらもスピーキング能力向上に比較的比重があると考えられ，各チャプターがダイアログからスタートする，イラストや写真の多い 2 冊，すなわち Longman 出版の NEW SIDE by SIDE Book 4 の 3rd edition と，同じく Longman 出版の ExpressWays 4 の 2nd edition を，今回の対象として選定した。

3.2　Skierso（1991）のリストによる状況分析

中高一貫の女子校で，高校 1~2 年程度の学習者を想定して状況分析を行った。内容については Appendix のリストを参照のこと。

3.3　Daoud and Celce-Murcia（1979）のリスト（教材用のみ）による close evaluation

結果は Appendix のリストを参照のこと。教材のみならず，教材に附属したマニュアル等まで極めて詳細に分析・評価できるリスト。Skierso（1991）はこのリストを元にリストを作成している（McGrath, 2005）。観点は 5 つ，項目数は 25 ながら，項目の 1 文が長く，専門的な観点や用語があり，現場の教師よりは専門家向きと思われる。文の改訂と，重み付けを含めたフォーマットの改訂で，より使いやすくなると考えられる。

3.4　Skierso（1991）のリスト（教材用のみ）による教材分析

結果は Appendix のリストを参照のこと。教材のみならず，教材に附属したマニュアル等まで極めて詳細に分析・評価できるリスト。項目数が多く，項目の文も長く，専門的な観点や用語があり，現場の教師よりは専門家向きと思われるが，このリストの前に，状況分析のリストを付与し，更にこのリストの冒頭には状況に応じて回答する項目を決め，評価者自身がリストを改訂して使用するよう書かれている。このような示唆が明記されているのはこのリストのみである。

しかし，“systematic”，“cost effective”，“convenient”，“explicit”（McGrath, 2005）の 4 点にそぐわないと判断したため，項目を見るにとどめた。

3.5　Williams（1983）のリストによる close evaluation

結果は Appendix のリストを参照のこと。フォーマットが使いやすく，評価と重み付けを掛け合わせて数値で結果を割り出せる。また，質問項目も 1 文で短くまとめられており，読みやすいが，専門的でわかりにくい箇所や，多様な文化が存在する EFL 環境を前提としたものもあるため，質問項目の改訂が必要と思われる。

3.6　Byrd and Celce-Murcia（2001）のリストによる close evaluation

結果は Appendix のリストを参照のこと。教材が使用する状況に合っているかどうかのみを評価するリスト。分析的な項目が無いので，この結果だけでは教材の利点はわからないが，状況をよく把握している現場の教師には使いやすいと予想される。しかしフォーマットは使いやすく，評価もしやすい。重み付けの項目を足して，評価と掛け合わせて数値を

出せるようにすると，更に使いやすいと考えられる。

4.　結論と今後の課題

使用したどのリストからも，今回仮定した状況には Longman 出版の ExpressWays 4 の 2nd edition が適しているという結果が出た。このことからリストはどれも使用できると考えられるが，3 の各項で述べたように，改訂を要する個所があると考えられる。

今後の教材評価には，2.2 で述べたような手順に，重み付けと評価の欄を持つ，数冊を比較して見やすいフォーマットで，1 文の短い質問項目を持つ詳細なリストを使用した方法が良いと考えられる。既存のリストの良い点を合わせ，状況に合った質問項目を揃えて新たなリストを作成するのが良いと思われるが，質問項目の内容には Daoud and Celce-Murcia（1979）と Skierso（1991）を参考に，よりわかりやすいものに，フォーマットには Williams（1983）と Byrd and Celce-Murcia（2001）を参考に作っていくという方向性が考えられる。

また，今回はリストの有効性を主として考えたため，選択までで終わっているが，評価して選択された教材を実際に使用し，状況に合っているかどうか調査する必要がある。

教材の有効利用の模索と，評価を進めるためには，より多くの教材との比較が必要である。TUFS 言語モジュールの評価を考えるためには，テキスト教材のみならず，モジュールと同様の e-learning 教材の比較を健闘し，評価の項目，観点を詰めていく必要もある。

教材分析，教材評価のどちらも，非常に難しいものであるが，教材の改訂を進め，教材の利点や新たな活用法を探るためにも，どちらも重要な作業である。これからも引き続き研究を進めていきたいと思う。

参考文献

金谷憲（編）(2003)『英語教育研究リサーチ・デザイン・シリーズ⑧ 英語教育評価論』東京：河源社

馬場哲生 （2003） 「第 3 章 英語教育における評価行動の分析」 金谷憲（編）『英語教育研究リサーチ・デザイン・シリーズ⑧ 英語教育評価論』東京：河源社, 33-74

米山朝二（2003）『英語教育指導法事典』東京：研究社

Bruder, M. （1978） ‘Evaluation of foreign language textbooks: a simplified procedure’, Appendix 2, in H, Madsen and J. Bowen （1978）, *Adaptation in Language Teaching*, Rowely, MA: Newbury House, 209—17.

Byrd, P. （2001）. ‘Textbooks: Evaluation for Selection and Analysis for Implementation’, in Celce-Murcia, M （Ed.）, *Teaching English as a Second or Foreign Language* （3rd ed.）(pp. 415-427）. Boston: Heinle & Heinle.

Cunningsworth, A. （1984）. *Evaluating and Selecting EFL Teaching Materials*.

London: Heinemann Educational Books.

Daoud, A.-M. and Celce-Murcia, M. （1979）. 'Sample checklist for Textbook Evaluation', Appendix A, in Celce-Murcia, M （Ed.）, *Teaching English as a Second or Foreign Language* （3rd ed.）（pp. 425-426）. Boston: Heinle & Heinle.

McGrath, I. （2005）. *Materials Evaluation and Design for Language Teaching* （2nd ed.）. Bodmin: Edinburgh University Press.

Molinsky, S.J., & Bliss, B. （1999）. ExpressWays 4 （2nd Ed.）. Longman.

Molinsky, S.J., & Bliss, B. （1999）. *NEW SIDE by SIDE Book 4* （3nd Ed.）. Longman.

Skierso, A. （1991）, 'Textbook selection and evaluation', in M. Celce-Murcia, （ed.）（1991） （2nd ed.）, *Teaching English as a Second or Foreign Language*, Boston: Heinle and Heinle, 432-453.

Rea-Dickins, P. and Germaine, K. （2003）. *Evalation* （6th ed.）. Oxford: Oxford University Press.

Yuki, K., Abe, K., and Lin, C. （2003）. Development and Evaluation of TUFS Dialogue Module. In Kawaguchi, Y., Zaima, S., Takagaki, T., Shibano, K. and Usami, M. （Eds.）, *Proceedings of the First International Conference on Linguistic Informatics* （pp. 273-279）. TUFS.